
魔血吸の在り方

羊妨害者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔血吸の在り方

【Nコード】

N6764Z

【作者名】

羊妨害者

【あらすじ】

メチャクチャな不幸に襲われた僕は、気付けば異世界に居た。初っ端から最悪な自体が襲ってくるけど生存本能全開でなんとか生き延びてやったぜ！ってあれ？なんか体が変わるんだけど・・・もしかしてこれって・・・！？

僕の終わりと始まりについて（前書き）

処女作です、どこるか初めて物語を書きます。

小説家になろうさんに書かれた作品がおもしろかったので、皆様の暇つぶしに貢献出来ればと思い書いた作品です、拙筆な上、筆に任せて書いているので、それでもよいという方はどうぞ、お読みくださいませ。

僕の終わりと始まりについて

目を覚ますと世界が逆さまになっていた

足の方に木々が伸び、その先に空がある

頭上に地面があり、とても質の良さそうな腐葉土もそこにあった

そんな中、寝ぼけた頭で色々考えた挙句、僕は呟いた。

「じじ、・・・どじじ?」

それが異世界に来て初めてのセリフだったことを、僕はまだ知らない

< 魔血吸の在り方 >

そんな訳で、段々と晴れていく意識の中、徐々に自分の状態が理解
出来てきた

僕はどうやら背の高い木の枝にズボンが引っ掛かって、逆さ吊りに
なっているようだ

もちろんそういう事が日常的に起きるほど、アグレッシブな人々が僕の家の周りに住んでいることはない（僕はそう信じている）し、当然僕にも逆さ吊りで寝る趣味はない。

そうなつてくると、自然に、意識がなくなる前のことについて考えはじめる。

そこで僕は思い出した。

「そうだ、僕は・・・何故か海外旅行になつた修学旅行で飛行機に乗ってる途中にハイジャックにあつて何故か僕だけ見せしめに殺されかけたところをなんとか反抗し、反撃し、遂に無力化に成功しかけたところでハイジャック犯の最後の抵抗で扉から突き落とされ太平洋の真ん中にヒモ無しバンジーしてなんとか海にうまく飛び込んで水面に浮いていき、遠くに見える無人島に流されながら泳ぎながらなんとかたどり着き、水源を確保して食料を探し、大丈夫そうに見えたきのこを食べたとたん苦しくなつて意識がなくなつたんだ」因みにそのきのこは猛毒であつた

・・・我ながらありえないな、うん

思い返せばここ数ヶ月は不幸のオンパレードだつた

マンションの上から植木鉢が降つてきたり（額にかすつた）トラックがつつこんできたり（後頭部にかすつた）人間違いで殺されそうになつたり（脇腹に包丁がかすつた）何故かマンホールの蓋が開いていたり（指が引つかかつて助かつた）などなど・・・

細かいことを入れれば百はあつたんじゃないかな、うん

父さんが僕に常々「何があっても生きる、生きてさえいればいい」と言っていてこなかったら、最初の数回で諦めていただろうな

しかしまあやれやれである、結局のところ僕は死んだのだろうか？

別に天国や地獄に行くとはまでは思わないけど、いきなり森の中とはこれいかに

もっと分かり易く「あなた死にましたよ」って言うてくれないと懺悔のしようもない

いやこの思考こそ、本当に仕様のないことなのかも知れないけど・

と、そこで枝がピキピキと音をたてているのに気がついた

(あ、これは折れるな)っと思う間もなく枝は折れ、頭が地面に吸い込まれる

異常に鈍い体を何とか動かし頭を庇うが、思った程の衝撃もなく地面に落ちた

そこでようやく僕は体を動かして辺りを見る気持ちになった

どうやら森のかなり深い所らしく、人の気配など微塵もない

僕が死んだ(?)はずの無人島はこれほど背の高い木々はなかったように思うし、なにかが足を踏み入れた形跡すらない

そう、僕の足跡すらないのだ

よってここはあの無人島ではないはずだ

他の可能性を考えても、あれほどの高さに僕を引き上げる動物なんているはずもないし、いたとしたって地面に何かしらの跡が残るはずだ

あるとすれば人為的に行われるぐらいだが、それこそメリットがなさすぎる

うむ、このミステリーは僕には解けそうもない

解けないこと、分からないことは後回し

テストという関門を毎度ぐぐり抜ける日本学生にとって必須のスキルだ

しばらく辺りを歩いてみるが、特に何も無い、いや、あるにはあるが、素人では判断のつかない事ばかりで意味を見出せない

ここが安全である保証は全くないので、早急に移動しなければ

因みに動物はいるようだ

鳥(?)の声があちこちから聞こえてくるし、虫もいる

獣道のようなものも見つけたし、縄張りの主張のために傷つけられた木も見つけた

傷の位置は大体下から2mぐらいの位置だ

・・・やばい、これはつまりその位置に傷をつけることができる動物がいるということだ

熊だとしたら絶対になわなない、死んだふりは効かないらしいし

兎にも角にも移動しなければということで、僕は太陽(?)の位置を方角の基準にすることにした

太陽(?)の方角は登りぎみで、逆は下りっぽかったけど、僕は太陽(?)の方角に向けて歩くことにした

先ほどから太陽に?が付くのは確信が持てないからだ、もしかしたら地球にとって月にあたるものかもしれないし、沈んだり昇ったりするのもわからない

・・・しかし面倒なので、僕は太陽(?)を太陽だと思い込むようにしよう、私がそう思うからそうあるのだ、って昔の偉い人も言うてた気がするし

水場を探すなら降りるべきだけど、この場所の状況が知りたい僕はあえて登ることにした

本当なら木に登って辺りを見渡せばいいんだけど、現代の高校生にそれを求めるのは酷である

そんなこんなで登り始めて2時間ぐらい、一向に見晴らしがよくなる心配がない

太陽も低くなってきた、このままいくとこの人工物の一切ない場所
で野宿である

流石にあぶないよな、寝て起きれませんでしたじゃ洒落にならん

ちょっと登り始めたのを後悔し出した頃、木々の切れ間が見えた

少し駆け足でたどり着くと、そこは崖になっていた

・・・絶句するほど美しい景色を、僕は人生で初めて見た

夕日が赤く染めあげることでの周りの山々は、その威厳をさらに強く
し、木々に何とも言えぬ色彩をあたえていた

澄んだ空気はどこまでも見渡せて、夕日の下にわずかに海が見えた

ちょうど僕が立っている場所の真下が川の初めにあたると、そ
こから川は蛇行しながらも確かに海に続いている

雲は流れ、風が吹き、僕は人生で初めての感動に酔いしれた

(山に登る人はこれを求めていたのか)と、なんとなく知った風な
事を思い描いていると、川の途中に橋が架かっているのが見えた

その辺りを注意深く見ると、右側に人工物のようなものがわずかに
見えた

よかった！人がいる！と、歓喜をあげようとして思い出す

(夜、どうしよう・・・?)

村に着くまでにどう考えても日が沈む、というか2、3日はかかりそうだ

日が完全に沈む前に寝る場所を決めなければいけない、サバイバル経験皆無の僕にだって分かることだ

一旦森の中に戻り、良さそうな場所がなかったか思い出す

(あそこは落ち葉がたくさんあったから、それに埋もれて寝れば安全かな?それともあの岩場の隙間で寝た方が・・・)

などと考えていても、先ほどの景色が頭から離れず、つい振り向いて呆けてしまう

(いつか、いつかもう一度行こう)

そう考えていると、背筋が凍るような、嫌な予感が僕を襲った

僕はとっさに、後ろに倒れるように回避行動をとろうとした

死ぬ直前に起きた百を越える不幸が、彼に第6の感覚を与えていたのである

瞬間、右腕に強い衝撃

左肩から倒れこみ、前転をするように受身を取りながら、予感の正体を確認する

そこには3mを越える背丈の怪物がいた

人の形をとってはいるが、体の大きさや手足の指の本数、グレーに近い体色、何より赤い、瞳のない目が人でないことをありありと証明していた

と、そこで、怪物の指先に赤いものが付着しているのに気がつく

おそらく人の血だろう、かなり新鮮で乾いておらず、付いて間もないことが伺える

その段階でようやく気がついた、右腕の感覚が全くない

恐る恐る見てみると、僕の右腕は二の腕を1/5程残して消えていた

僕の終わりと始まりについて（後書き）

勢いで書いてしまった、今は反省している

私は昔から執筆活動に興味があつて、書こう書こうと思つていただけど、どうにも億劫で遂に今にいたつてしまいました。

この作品は、そんな自分の背中を押すために書いた作品です。

つまり見切り発車です。

ですので、いきなり更新がなくなったり、展開がおかしくなったり、数々の矛盾があると思いますが、なんとか完結させてやりたいと思つております。

どうか生暖かい目で見守つてやってください。

感想なんかを送ってくださるととても嬉しいです、厳しい意見もどんとこいです、よろしくお願いします。

怪物の在り方（前書き）

とりあえず投下、誰かが読んでくれたらうれしいです。

怪物の在り方

「つつつ………!!!」

危うく叫びそうになって、何とか声を押さえつける

相手は見たことも聞いたこともない化け物、叫ぶ事で警戒させる事が出来るかもしれないが、それが発端になってすぐに殺される可能性の方が高い

命の危機に瀕したことで、死んでから今までいまいち回転の遅かった頭が、いつもより速く回り出す

痛い、熱い、痛い、嫌だ、いたい、イタイ、アツイ、イヤダ、イヤダ、イヤダ、

左手で右肩付近を握り、一応の止血をする

右肩から心臓の鼓動に合わせて血が吹き出す、嫌な汗が全身から吹き出す

いやだいやだイタイイタイイヤダアツイイタイ

今までだってこんな絶体絶命を生き延びてきたんだ、大丈夫、きっと生き延びる可能性は残ってるはずだ！

太陽に向かって走り出す、と同時に化け物がこちらに飛びかかってきた

イタイイタイイヤダイヤダナンデイヤダイヤダツライイタイ

体の大きさに見合わずとんでもなく速いつ！僕の全力疾走の2倍ぐ
らいの速さだ

木々を盾にしながら、できる限り不規則に走り太陽を目指す

イヤダイタイいたいいたい痛いよう・・・

大量の出血のせいで頭がくらくらする

化け物は僕を追い詰めるよう、僕の通った跡そのままに着いてくる

大丈夫、しっかり冷静に考えればきつと生き残れる

時々背中に掠めるような感覚があるが、振り返らない

痛いよ、熱いよ、寒いよ、辛いよ、痛いよう

大丈夫、この先にきつとあそこがある

化け物の追撃を何度となく避けながら、目的地をようやく見つけた

僕は遂にあの美しい崖までたどり着いた

僕が振り返ると化け物がこちらを不満げに見ていた

大丈夫、勝負は一瞬だけど、速さは僕より少し速い程度、大丈夫

僕は自分に少し嘘を吐きながらタイミングを図る

・・・化け物が笑った様な気がした

瞬間飛びかかってくる化け物

僕は奴の股の下を滑り抜ける

野球のスライディングの要領で股下をくぐり抜け、化け物の尻目掛けて蹴りを放つ！

弱者が使う強者に勝つための常套手段、それは他の力を使う事

例えば敵の力、例えば重力、例えば相手の油断、それらをフルに使って初めて弱者は強者に勝てる

これで決まればよかったが、僕の蹴りは空を切った

僕が的外れの蹴りを放った訳じゃない

怪物が、僕の認識できる速度よりはるかに速く動いて視界から消えたのだ

音を使りに右を向くと、やはり奴は笑っていた、僕を嘲笑っていた

そうだ、奴は僕が五感で認識出来ない程の速度で、僕の右手を奪っていた

これまでの追いかけてこは、奴にとってはただの遊びだったのだろう

駄目だ、失敗した、おわりだ、しぬ、しんじやう

ならば次は、さらにこの命を賭けるのみ！

僕は崖に向けて駆け出し、飛んだ

あの川の所に落ちれば、もしかしたら生き延びれるかも知れない

しかしその希望も、すぐに打ち砕かれる

いつの間にか怪物は僕の後ろに立っていて、飛んでいる僕の足を掴んだ

そしてそのままゆっくり振り上げ、反対の地面に叩きつける

咄嗟に左手で頭を守ったが、脳が揺れる、体が軋む、口の中に血の味が広がる

怪物は握っていた僕の右足を根元から握りつぶした

痛いいたいしぬしぬしぬしぬシヌシヌシヌシヌシヌ

僕は奴の手を左足で蹴り、反動で距離を取る

しかし怪物の遊びは終わったのか、即座に近づき拳を僕のお腹に向けて振り落とした

左足で拳に対抗しようとするが、難なく縦に押しつぶされた

その反動で少し距離が取れたが、もはや僕の命は風前の灯火、春の夜の夢だろう

シヌシヌシヌシヌシヌシヌシヌシヌシヌイヤダイヤダイヤダ

怪物は満足気に僕に近づいて、右手の掌を僕に近づける

万策尽きた僕が思うことは、ただただ一つ

一矢報いてやりたい、何か奴に、少しでいい、蚊に刺され程度でいい、せめて、一矢

左手を動かし、火事場のバカ力で奴の手に噛みつく

僕の足の骨が僅かに手に刺さっていたのだ

そこに全身全霊死ぬ気で噛みつく

奴は少し驚いた様子で僕の左腕を掴み、自分の右手から僕を引き離そうとして、勢い余って僕の左腕を握りつぶした

僕はそのまま投げられて中に浮かぶ

世界がスローモーションになる

走馬灯という奴だろうか

色々な事が思い浮かび、それと同時に思考も加速する

死んだと思ったらすぐにまたGAME OVERか

まああの美しい崖の方に投げ捨てられたんだから上等か

僕は奴から出た僅かな血と噛み千切った皮を飲み込んだ

シヌ？しぬ？死ぬ？死んだ？もう死ぬの？死にたくない死にたくない

いや、我ながら最後の抵抗は見事だった、うん

なんてっ たって奴に血を出させたんだから、普通の人間にや出来ないぜ

よくがんばったよ僕、えらいえらい

死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない

僕はゆっくり崖に向かって放物線を描く

崖の端に生えている木の枝の下をもうすぐ通り抜ける

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！

・・・僕の本能はまだ諦めてないみたいだな

あの枝、手を伸ばせば届きそうだな

まあ伸ばす腕がないんですけどね

死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない！

腕があれば、もっとあの化け物に、痛い目に合わせてやれるのに

足があれば、もしかしたらあの化け物から逃げられたかもしれないのに

目に小さな小さな村が見える

あそこに住んでる人たちは、この化け物に対抗できるのかな

もし生きてたら、ここに危険な化け物がいることを警告できるのに
もっと強い腕があれば、もっと強い足があれば、もっと強い体があれば

・・・畜生、生きたいな

お腹の底が熱くなる、今の僕の顔は涙と鼻水でぐちゃぐちゃだろう

あの枝に届く腕が欲しい、あの化け物を蹴り飛ばせる足が欲しい、
無茶な行動に耐えられる体が欲しい！

死にたくない、生きたい、生きたい、まだ、生きていたい！！

気付けば僕は、枝を掴んでいた

怪物の在り方（後書き）

とりあえず主人公覚醒、次号待たれよ

一方的な在り方

脳が溶けそうになる程頭が熱い、意識が体を突き抜けたようだ

よく分からないけど、手足が元に戻ってる

化け物がこちらを見てる

だけど不思議と命の危機は感じない

世界はまだゆっくりなままだ

さあ、平穩を取り戻そう

化け物がそばにあった木をヘシ折って上段に構える

そのまま僕に向かって振り下ろしてくる

僕は右手を頭上に持ち上げて、防御の姿勢をとる

今までだったら無事で済まなかっただろうけど、今なら

振り下ろされた木は、僕の右手に当たり、そこで止まった

木が僕と化け物の間でたわむ

化け物はそのまま力を入れつつけ、遂に木が折れた

その折れてギザギザになった断面を僕に突き入れる

僕はその先端を左手ではたく

それだけで狙いがズレて、その突きは外れた

化け物は僕と距離をとり、木を上空に投げた

木は空高く舞い上がり、僕の方に落ちてくる

と、同時に化け物が駆け出し、僕との距離を詰め、必殺の拳をくりだそうとする

僕は木が落ちてくるまでの時間を、のんびりと待って、化け物が詰めてくるのを待った

そして、化け物が拳を放った瞬間、一步だけ前にでた

化け物の懐にはいった僕は、右手を化け物の胸の中心に、突き立てた

化け物は何が起きたのか分からない様だった

木が地面に落ちる大きな音がする

僕が、右手を捻りながら抜くと、化け物は三步下がって膝を地面に

着けて、こちらを睨む

化け物は、最後の抵抗とばかりに走ってくる

僕はその頭を蹴り上げる

パツツという音と共に、怪物の頭が血飛沫に変わった

化け物はまるで僕を抱きしめるような姿勢のまま、僕に倒れかかり

やはり僕を抱きしめずに倒れた

体中に化け物の血が着いているが、僕は唇についた血を舐めとって

そのまま意識を手放した

～近隣の村～

(・・・ん！？)

何か、とてつもなく大きな力を感じた

山の方からだった、見える範囲では異常はない

(ふむ?)

あれが魔法によるものだとしたら相当な規模だ

それこそ、山ごと村が吹き飛んでもおかしくはない

視界に入らない程遠くの出来事とは考え難い程の力の大きさだった

私は全神経を集中しながら山の方を警戒するが、異常は感じられない

・・・思い過ごしだろうか?

今の世の中、何が起きてもおかしくない

警戒のし過ぎと言うことはないだろう

今後、今少し警戒を強めよう

・
・
・
・
・
パ
パ
?

〜
?
?
?
?
?
}

一方的な在り方（後書き）

え、実はこれで最終回です

嘘です、ここまですがプロローグです

まだがんばります！

ここでの在り方(前書き)

投下だぜ!

「」での在り方

・・・？

・・・さ、寒い・・・？

・・・けど、もうちょっと寝ててもいいよね

もうちょっと・・・

そういえば、布団はどうしたんだろ？

地面も若干固い気がする・・・

まあいいか、お休み・・・

・・・

そういえば、怪物はどうなったんだっけ？

・・・ん？怪物？

「のわああ~~~~!!?」

一気に目が覚めた、そんな朝的一幕

叫んだ僕は急いで周りを見渡すが、怪物らしきものはいない

(ふう〜〜・・・)

とりあえず一息つくが、心臓はバクバク、大爆発寸前だ

(でも、死体らしきものすらないのは何でだ?)

不思議な事に、怪物の死体は消えていた

(もしかして、・・・夢?)

怪物がヘシ折った木の跡があったので、全くの夢ということはないだろうけど・・・

それに・・・

「この腕、どうなってるんだ・・・?」

そう、僕の腕は怪物と同じグレーの色をしていて、体との接続部分はグレーと肌色で複雑な模様を描いている

足も同様だ

とにかく、状況を整理すると

- 1、あの時僕は怪物に出会い、命からがらこの崖まで逃げてきた
- 2、両手両足を失いながらも反撃し、逃亡を試みたが、あえなく崖に放り投げられる
- 3、突然手足が生え、何故か負ける気がしなくなって、事実怪物に

勝利

4、その後意識を失う

・・・ふざけてるな、特に3番目

つというか怪物だよ怪物、ありえないよ

あんな生物いたら普通にテレビで放送されるよね

もしかしてUMA？未確認生物？

いやいやビックフットは雪山に出るんじゃないよ

ていうかここいらの植物も見したことないものばかりだし

そつえば僕、どうしてあんなに動揺してなかったんだ？

いくら何でもいきなり宙吊りにされたらパニックと思うんだけど

さらに言えば木から落ちた時も衝撃が全然なかったし

そつだ、怪物つて1匹(？)なのかな？

あんなのが群れで襲ってきたら命がいくつあってもたりないよ！

次から次へと疑問が浮かんでは消えていく

だけど、その中で一番大事なことは

「……喉が乾いたあ」

これである

昨日は全く欲しくなかったけど、今はとにかく一杯の水が欲しい

そういえば、崖の下に川が流れていた筈だ

崖を覗いてみると、やっぱり川があった

というかどうなってるんだ？川が僕の真下から流れてる？

とにかくあそこに行けば、水が飲めることは間違いなさそうだ

(さて、行くにしても、どうしたもんだらうか・・・?)

崖は視界の端の方までずっと続いていて、迂回するのは億劫だ

普段なら絶対取らない手段だが・・・

(飛び降りる・・・か?)

今はこの腕と足がある

もしかしたら耐えられるかも知れない

とりあえず、垂直飛びをしてみた

プーン

・・・軽い擬音で表現し過ぎだけど、3mぐらい飛べた

正直、怖かったあゝ

しかし、崖下までは100m位はあるんじゃないかな・・・？

次はもう少し力を入れてみた

ビヨン

ドスン

10mぐらい飛べた、正直死ぬかと思った

・・・うん、いけそうダネ

僕は深呼吸を繰り返し、気持ちを落ち着かせる

大丈夫、大丈夫、いざとなれば川に落ちればいいんだ、大丈夫

深く息を吸って、軽く助走をつけて、飛ぶ！！

えも言われぬ浮遊感のあと、もの凄い速さで落ちていく、落ちていく

股の間がキュッってなった

けど、ある程度すると、崖の下の壁が近づいてきて

そこに手や足を突き出し、減速しながら落ちていくと、だんだん楽しくなってきた

横に回転したり、縦に回転したりして遊びながら落ちていくと、地面が近づいてきた

僕は空中で前転しながらタイミングを計り、手と足を地面に叩きつける！

当たりに鳥の飛び立つ音が聞こえる、キマった！

ズボンのお尻が破れている事に気づいたのは、それからしばらく経ってからだった

川は初め、少しだけ滝になっていた

崖の下の裂け目から流れ出ているようだ

水は日本でも滅多に見れないくらい澄んでいて、逆に飲むのをためらってしまった

しかし、一口飲んで、あまりのおいしさにガブガブと飲みまくった
鋭く冷たく、どこか甘い、世界の名水100に絶対エントリーすべきだ

結果お腹を下し、人生で初めて木に隠れて野ソをした

お父さん、息子はがんばって生きてますよ

そんなわけで、一息ついて、あらためて考える

いきなり森の真ん中にあらわた僕

襲ってきた怪物

生えてきた腕

全くもって分からないことだらけだ

幸いにも気温はそこまで低くなく、ここは影になっているうえに、短パンになってしまったズボンと、ノースリーブになったシャツや上着でも、ちよつと肌寒い程度で済んでいる

もしかしたら夏なのかもしれないが、有難いことである

あの怪物の返り血は、起きた時には跡形もなく消えていた、そこはラッキーだったのかも知れない

血染めの服なんて嫌だからね

そして一番気になることが、この地方に、いや、認めよう、この世界に僕の様な人間がいるかどうかだ

ここは、おそらく異世界なんだろう

怪物もでてきたし、腕も生えてきた、元の世界ではありえないことだ

あの怪物が、実はこの世界の人間にあたる存在で、崖の上から見たあの橋も、その脇の人工物も、全部あいつらが作ったとしたら

僕はどうやって生きていけばいいのだろうか？

とにかく、今、一番大事なことは……

グウ~~~~

一番大事なことは……

キュルルルル~~~~

一番大事なことは、腹が減ったということだ

1111での在り方(後書き)

少年の冒険が、始まる・・・

メリー・クリスマスですね

そう、今日はイエス・キリストが死んだ日

人の死を祝うなんて、お前ら人間じゃねえ！(タケシ風に)

知ってます、生まれた日なんですよ

私はこの3日間、仕事です

みなさんの幸せを願っています(^3^)/

サバイバルの在り方

前方80m、目標、補足しました

(それでは作戦を開始する、3、2、1、GO！)

僕はできるだけ静かに、そして素早く、手足をゴムの様にして目標に近づく

(ここでやらなきゃ、僕が死んじゃうんだ！)

決して気付かれてはならない、少なくとも攻撃範囲までは・・・

その時、目標がゆっくりとこちらを向きだした

(クソッ！こうなったら・・・！！)

僕は全力で足を踏み込み、

全力でコケた

派手な音がしたので、目標である犬っぽい猪はすぐに逃げ出した

ご飯を探して1時間、獲得数、ゼロ

「イテテテツ・・・」

僕はご飯を探しながら川沿いを、下流に向けて歩いていった

所々木の実や食べられそうな草、キノコなどが生えてはいるが、前世の死因がキノコの毒なので、とても食べようとは思わない

それにこの体なら、きっと簡単に動物が狩れると思うんだ

・・・思い上がりだったみたいだけど

普通に歩いたり、走ったりする分には問題ないのだけど、元の自分のスペックを超える力をだそうとすると、なかなか思う通りにいかない

力が強すぎるんだ

下手に踏み込むと地面が砕けて、思うように動けないし

ゆっくりでは当然、獲物に逃げられる

攻撃手段は考えてあるけど、それにしただって近づかなければ当たり前じゃない

獲物を見つけるのはそんなに難しいことではなかった

この体になってから、視力も上がっているみたいで、普段なら見逃すような動物でも気付けるんだ

と、そんな時、鹿っぽいのが川で水を飲んでいるのを見つけた

(よし、今度こそは！)

僕はもう、気付かれずに近づくの諦めた

もういつそのこと気付かれよう

気付いても逃げられないようにしよう

ある程度まで近づいて、

(いっせいの、せっ!!)

全力で立ち幅跳びをした

やはりというか何というか、この体、化け物である

目測40m程の距離を、一気に詰めて、目標は目前である

驚いた顔をした鹿がこっちを見ている

(ここであせっちゃいけない、秘密兵器だ!)

僕は右手に集めてあった小石たちを、軽く振りかぶって、投げた

超常の力で投げられた小石の群れは、目標に向かって亜音速で飛んでいった

すぐに逃げの体制に入っていた鹿の後頭部にHIT!

(よしっ!! 僕が考えた必殺技、ロック・ショットガン碎石銃が見事に命中した!)

説明しよう、ロック・ショットガン碎石銃とは、当時中学生の僕が、もしすごい力を手にしたら、どんな技を使うかを考えた結果、コストと威力、命中率に

優れたこの技を思いついたのだ！

ありがとう、昔の僕！恥ずかしいぞ、昔の僕！

僕はガッツポーズを解くと、素早く獲物に近づくが

(あゝ・・・)

見事に顔が消えていた

威力が強すぎたようだ

兎にも角にも食べれる様にしなければ

(とりあえずは、血抜きかな?)

後ろ足を持ち、頭を下にして、木の枝に引っ掛ける

ここに来て僕の枝に対する好感度は急上昇である、枝loveだ、子供が出来たら名前に枝という文字を一文字入れよう

(そして次は、内蔵の処理か)

魚を捌いた時の知識で処理をしようとするが、生憎包丁がない

僕は川にある石をいくつか割って、鋭利な物を作り出す

こうやって作られた物を打製石器と呼ぶ

本来はこれを研いで摩製石器を作りたいとのだが、間に合わせなのでこれでいいだろう

ビバ！社会科の知識！

とりあえず人差し指と親指に思いっきり力を入れて、毛皮に穴を開け、そこを起点に捌いていく

お尻の穴まで開くと、デロンと胃と腸が出てきた

口の方の端を指で取り出し、肛門のあたりは怖いので、丸々千切り取り、そのまま少し遠くに捨てる

他の内蔵も、生で食べれるところがあると聞くけど、わからないので全部捨てる

次は、皮を剥こう

皮沿いに石器をいれると案外簡単に取れていった

足のあたりで止まったけど、面倒なので千切る

皮は川で洗って干した

もうそろそろ血抜きもいいと思ったので、肉を下ろして川で洗った

ぶっちゃけ作業中、何度か吐きそうになったけど、気合で乗り切った

っていうかなんでこんな真面目に解体してるんだろ？

これが日本人の性なのか

もったいない、もったいない

かまどは少し開けたところに適当に石で組んで、乾いた木を拾って
くる

動物が肉に寄ってきたので本気で威嚇する

かまどに木を組んで、真ん中に燃えやすそうな枯葉を据える

太めの木を手刀で割って、そこに枝を突き立て、回転させる

火おこしだ

最初は枝がすぐに折れて失敗

次は結構もったけどやっぱり失敗

そんなこんなで失敗しまくる

イラツときた

枯葉に木の粉をかけて、もう片方の割れた太い木を手を持ち

枝を突き立ててた木に、力任せに擦る、擦る、擦る！

流石怪物の力と言うべきか、少し火が出たのでそれを枯葉に近づけて火を大きくする

かまどに火が灯った

危うく満足しかけたけど、肉を適当な大きさに切って炙る

そして齧りつく

「う、うめええ〜!!?」

なんだこれ、何だこれ!?

この世で食べた肉の中で一番おいしい!

僕は焼く手間が億劫になってきて、燃料の枯れ木と共に、何本か枝を取ってきて、火で軽く炙ったあと水で洗い肉を刺す

そしてかまどで一気に炙る

これほど原始的な焼肉があるだろうか

夢中になって焼きつづけていると

(あれ? やっぱりそんなにうまくない? むしろ味がない?)

調味料を一切使わない焼肉の味の無さに気付きだすのであった

サバイバルの在り方（後書き）

*ここで表現されているサバイバルの仕方は作者の妄想です、
実体
験ではありません、注意してください

なるとなれば異世界だからでご勘弁を

初めての異世界人の在り方

僕は虫が集まった肉を再度洗い、毛皮に包めるだけ包んで、残りは捨てた

その後、その場に手を合わせて川沿いを移動し始めた

とりあえず、橋を目指そう

僕は川の周りをピョンピョン飛びながら移動している

力が強すぎるので、普通に走るより、この方が効率がいいのだ

川が合流してだんだん大きくなる様を見ながら黙々と進んでいくと、日が沈んできた

この体なら今日中に着くかと思ったけど、上から見て思ったより、距離があつたみたいだ

ひらけた所を見つけたので、ここで晩ご飯にしよう

かまどを適当に作り、枯れ木を集め、適当なサイズに折る

木を組んで、枯葉を置き、木と木を擦って火をつける

肉を炙る、食う

最初の感動は何処へやら、味気ない肉をよく噛んで食べる

肉が少し臭くなっていた

（結構大きな鹿だったのに、明日はもう一度、今度はもっと小さめのを狩ろう）

肉を森に捨て、寝る場所を探す

ふと、怪物に襲われた事を思い出す

あの時は必死だったけど、思い返すと恐怖が蘇ってきた

あの時もし勘に任せて避けていなかったら

あの時もし怪物が最初からずっと本気だったら

あの時もし・・・

考え出すとキリがないので、頭を振ってその考えを頭から追い出す

木の上、見晴らしがいいひらいてる場所、大きな石があり盾にして逃げるのによい場所

色々考えた結果、茂みの中に身を隠すように寝ることに決めた

鹿の毛皮を体にかけて目を閉じる

風の音が聞こえ、木々のザワめきが聞こえ、時々何かの動物の鳴き

声が聞こえる

闇の中でもよく見える視力を手にいれたとて、それは恐怖だった

朝起きたらこの手足がなくなってるんじゃないか

実はあの怪物は弱いモンスターで、もっと強いモンスターがここを襲ってくるかもしれない

あの鹿の肉は毒性を持っていて、じわじわと内部から破壊されてるかも

頭の中が恐怖に支配される

目標を持って動いていた時は隠れていた恐怖が、体中を脅かす

あの鳴き声は、僕を見つけた事を示しているのかも

実はあの怪物は僕の中にいて、人格を乗っ取るうとしてるかも

もしかしたらこの夜は明けないかも

結局その夜は、あまり眠れず、うとうとしていたら夜が明けた

引き続き川沿いを移動する

偶にこちらを追いかけてくる獣がいるが、無視だ

あまりおいしくなさそうだったからだ

ちよつと大きめの兎のような動物を見つけたので、朝昼兼用のご飯にする

今度はうまくいったのか、殆ど生きていた状態とかわらない肉を手にいれた

炙って食べた、なかなかおいしかった

皮や余った肉は捨てた、手を合わせて後、移動する

速く、速く、できるだけ速く

それだけを思い移動する

最初に比べれば、天と地程の差がでるほどの移動速度だ

日が真上に登り、傾きだしたころ、ついに僕はたどり着いた

「橋だ・・・」

お世辞にも立派とは言えないけれど、川を渡れるように、橋ができていた

「人工物だ・・・！」

嬉しさを爆発させながら、橋に近づいて作りをみる

どうやら石を組んで、その上に丸太を乗せて作ってあるようだ

幅はバスが一台通れるかどうかという程度

橋の上に立ち、辺りを見渡す

そう、橋があるということは、

「道だあ〜っ！〜！」

道があるということだ

僕は迷わず上流から見て右に歩き出す

人にあつたらどうしようか？

僕は受け入れてもらえるだろうか？

そうだ、言葉は通じるかな？

鼻歌でも歌えそんな気分で歩き出す、急ぐ必要はない

もうすでに、目に見える所に村があつたのだ

そうしてだんだん大きくなっていく村に、ニヤけた顔が隠せなくなってきた時、それを見つけた

（人だ！）

怪物より遙に小さいが、僕より少し背の高い人が、門の入り口でこちらの方を見ている

僕は走り出しそうな体をぐっと抑えて、でも締まりのない顔のまま歩き出す

（よかった！人がいた！よかった！よかったあ！！）

近づきながら、初めはなんて言おうか考えていると、相手が僕を見ているのがわかる

村人Aの20m程手前に差し掛かった頃、向こうが話しかけてきた

「それ以上こちらに近づくな、この魔物めが！」

臨戦態勢の村人Aを相手に、僕の顔が凍りついた

初めての異世界人の在り方（後書き）

主人公、名前すらでてないのに、不憫です

というか魔血を吸ったのまだ一度だけです、次まではもう少しかかります、タイトル詐欺・・・？いやいや

村へ入る人の在り方（前書き）

一応ギャグパートです

村へ入る人の在り方

村人Aは、頭巾の様な物を被り、口と鼻を覆う様にバンダナを巻いており、顔だけ見ると忍者のようにもみえる。

服装はゆとりのあるズボンの裾を糸で絞め、動きやすくしており、上はタンクトップの様な物を一枚着て、腕を露出していた。

右足を前に踏み出し、左手を鞘に、右手を柄に掛け、今にも抜刀しそうな様子である。

「ま、待ってください、僕は魔物などではありません！話を聞いてください！」

村人Aは眉をひそめながら言う。

「ほう、人語を解すのか、しかしながら何をもってお主を魔物でないとする！？」

僕は必死になって考えて、まずは相手の認識を確認することにした。

「そ、その前に何故僕を魔物だと思ったのですか？」

「フン、そんな事は見れば分かる！まだ日も高いのだ、見間違っ筈がなかるう！」

いくつか思い当たる節があったので、聞いてみる。

「この腕のことですか？」

「確かに腕の色と顔の色が違うが、肌の色など関係ないわ！」

「では、髪の色ですか？」

「黒髪なんぞ何処にでもおるわ！」

僕は若干ヤケになって叫んだ

「鹿の皮を腰に巻いているからですか!？」

「いやそれはお主のセンス次第じゃろ……」

若干呆れられた

しかしもうこれ以外に、外観で魔物と満たされるような事を思いつかない

どうしようも無いので正直に聞いてみた

「では何故僕を魔物と思ったんですか!？」

「そんなものは目を見ればわかる！」

……え、このおっさんもしかして犬好きに悪い人はいないとか、そういう事を言っているのだろうか？
失礼だけど、ワシの目に狂いはないとか、直感で物事決めつけちゃうタイプなのだろうか？

そんなことを考えていると、おっさんが続けて言った

「その、血のような紅い目を見ればなっ！」

「えっ？」

訳がわからなかった、僕は典型的な日本人の外見だったはずだ
肌は黄色、髪は黒、瞳も黒く、背もそんなに高くない

「ちょっと待つてください！僕の目の色は黒ですよ！？」

「たわけたことを！その目は、その目の色は、儂が何度も殺してき
た魔物たちの目と同様の紅色ではないか！！」

思い出してみる、川で顔を洗ったときのことを

少し自分の目元が赤い気がしたが、川は常に揺らいでいてよく見え
ず、充血しているだけだと思った

その後すぐに頭を洗ったし、やることがあったので確認しようとも
思わなかった

こっちの世界に来たときに持っていた物は服だけだったので、鏡の
類で確認も出来なかった

僕の目が、紅い？

あの、怪物みたいに？

「しかし人語を解する魔物など、話にしか聞いたことがなかった、
そういつた魔物は隠れているか、やたらと強いと聞いたが、・・・
ん、おい、どうした？」

おっさんが何かを言っているが、僕はもう限界だった

この世界に来てから碌な事がない

いや、来るちよっと前からか

何故こつも理不尽な事が押し寄せてくるのだろう

僕はただ、普通に生活してただけなのに

ただ、普通に生活していきただけなのに

何故、何故、なぜ・・・

頭の中がぐちゃぐちゃになる

溜まりに溜まったストレスが、溢れ出す

「・・・っ！」

「どうしたんだ、ん？ヤルのか？いいぞ、かかってこい！この村は
儂が守るぞ！」

僕は膝を地面に着き、上を見上げ、

「びえええ~~~~ん！！！」

泣いた、そりゃもう盛大に

人目など知ったこっちゃない

もう限界だったのだ、色々

「お、おい、ほんとにどうしたんだ？わ、儂が悪いのか？」

「ウワア~~~~ン！ア~~~~ン！」

「うつつ、子供なんぞ育てたことがないからどうすればいいかわか
らん！カミさんに全部任せすぎたか・・・」

「ええ~~~~ん！ギャ~~~~ン！」

「ほ、ほら、怖くないぞ、ん、大丈夫だ、お主も男じゃろ？どつじ

「や、ここらで泣き止まんか？」

僕は泣いた、泣き続けた

おっさんが何か言ってるが取り合わずに泣き続けた

しばらくして段々と落ち着いてくると、おっさんが言っていることが聞こえる様になってきた

「悪かった、悪かったから、いったん村に入ろう、な？あんたは魔物じゃない、わかったから、な？」

「グスツ、グス・・・」

気づけばおっさんはすぐ近くにいたので、手を差し出す

「ん？手を引いていけばいいのか？そうか、とりあえず行こう」

おっさんに手を引かれ、歩き出す

ずっと下を向いて泣いていたのでよくわからないが、村に入り、建物に入ったようだ

「お〜い、客だ、宿を頼むっ！」

しばらくして足音が聞こえだした

「あらあらまあまあ、もう客は来ないもんだと思ってたよ、その子がお客さんかい？」

「ああ、門の前で見張りをしていたら、橋の方からやってきて、あまりに怪しいもんだから魔もん「グスツ」いや、こいつは人間だ、

うん

「なにいつてんだい、確かに不思議な形なりだけど、どう見たって人だろっ?」

「いや、村の見張りとしてはだな、あやうとにかく、客なんだろう?」はい、そうです」

「なら構わないさ、その若人!いらっしやい、ゆっくりしていとくれ」

久しぶりに、人の優しさに触れた気がした

村へ入る人の在り方（後書き）

補足として、おっさんの瞳は黒色です

おそらく次話に説明をいれます

駄目でした、その次に入れます

本当はもっと早く執筆したかったのですが、飼い猫に邪魔されました
おのれ、かわいい顔しておつて、かわいいじゃないか
その後、3時間程時間を盗まりました

おかみさんの在り方（前書き）

アクセス解析という物を知りました

200人以上もの人が、この小説を読んでくださってたと知って、
恥ずかしいやら嬉しいやらで大変です

もし気に入っていただけたら、今後ともよろしくお願いいたします。

おかみさんの在り方

泣き疲れた僕は、部屋に案内されるとすぐに眠りに落ちた

目が覚めた僕は、定番のセリフを言おうとして、

「知らない天井・・・でもないのかな？」

やっぱりやめた

たかだか3日ぶりだというのに、随分久しぶりにゆっくり寝た気がした

ベットは元の世界程柔らかくないが、地べたとは雲泥の差だ
体が少し痛いのは、多分別の理由だろう

「ん〜・・・っ！はあっ・・・」

僕は伸びをして窓を見た、もう日が昇り始めてるみたいだ
ドアを開けて、廊下に出て、階段を目指す

壁は煉瓦で、日本にはない情緒が感じられる
二階の部屋から一階に降りる

そこで、この宿のおかみさんに出会った

「おはようございます」

「あら、おはよう！随分とよく眠れたみたいだねえ、顔を洗うなら
そこの角の扉から出て、直ぐにある井戸を使っておくれ」

「いやあ、ありがとうございます」

よく考えると、日が沈む前に寝て、日が昇ってるってことは、12時間以上寝ていたってことか
そりゃあ体も痛くなる訳だ

井戸は滑車が付いていて、ロープの先のバケツを下ろして、水を汲みあげるみたいだ

バケツの水を桶に流し入れて、顔を覗き込むと自分の顔が写っていた
その顔は泣き腫らしてむくんでいたが、その瞳は、

「ははっ、本当に紅いや・・・」

まるで映画に出てくるヴァンパイヤみたいな紅だった

顔を洗い、口をゆすいで、ついでに頭も洗っていると、おかみさんがやってきた

「ほら、タオルだよ」

「ありがとうございます」

礼を言ってタオルを受け取り、顔と頭を拭く

「お客さんにこういっちゃなんだけど・・・」

おかみさんが言う

「??どうされました?」

「あんだ、ついでに体も拭いちまいな、ちょっと臭うよ」

繊細な男子高校生の心は、痛く傷ついた

「でも、替えの服がないんです」

「見りゃわかるよ、私の旦那の服を貸してあげるよ」

おかみさん、助かります！

少し（実際にはかなり）ダブダブな服を貸してもらい、そでや裾を折って着る

「しかしあんだも妙ちくりんな服を着てたねえ？なんだいこの袖口？まるで腕ごと引きちぎられたみたいじゃないかい？」

腕ごと引きちぎられたんです

「しかもこの留金、よくこんな精密なもの作ったねえ、あんだどっかの貴族さんかい？」

ただのジッパーです、ユニ　口で買いました

「いや、あっはっはっは」

僕は笑ってごまかした

「それにしても、お腹、減ったんじゃないかい？」

言われて気付く、すごくお腹が減っていた

「どうだい、ちょいと多めに朝飯、作つといたよ」

おかみさん・・・一生ついてきます！

メニューは米とシチュー、サラダにスープが付いていた

見るからにおいしそうなたんぱく質を立てる料理に、生唾がとまらない！

「それでは、いただきますっ！」

「はいよ！」

おかみさんが苦笑ぎみに言うのを聞かず、ガツつく！

久しぶりのまともな食事だ！

シチューはそれぞれの野菜がとろける寸前まで煮込まれており、野菜本来の甘味と、牛乳(?)の甘味が絶妙に絡み合い、さらにこれに米の食感が相まって想像を絶する程うまい

所々にある肉も大ぶりに切られており、最初に焼いてあるのか肉汁が中にたっぷりと詰まっています、これがなんともいえぬうまい！

喉に詰まりそうになりながら、実際に詰まりそうになるとスープに手をだす

こちらはあっさりとした塩味なのだが、どこか懐かしく、温かみのある味で思わず笑みがこぼれる

サラダも鮮度がいいのか、ドレッシングも最小限しかかけられていないにもかかわらず、シャキシャキした歯ごたえと酸味、食べた後の爽やかさがなんともいえない味をだしている

「そんなに急いで食べなくても、誰も取りはしないよ」

おかみさんがニコニコしながら言うが、しまったこっちゃんない茶碗が空になったのを見て、おかみさんが言う

「おかわり、いるかい？」

僕は無言で茶碗を突き出した

僕は散々食べに食べて、食後のお茶もいただくことにした

「いや〜見事な食べっぷりだね！作った甲斐があったってもんさあ」

おかみさんが呆れまじりに言う

「いや、本当においしかったんですって、特にあのシチュー」

「あれはうちの宿特性のシチューでね、昔はアレを食べるためだけに来た客もいたんだよ」

そういつて笑う顔に、どこか影があるのが見て取れた

「そういえば、他のお客さんは・・・？」

不思議に思っていたのだ、起きてから一度も他のお客さんに会っていないのだ

それに、おかみさんは僕に付きつきり、他に仕事もしていない
おかみさんはどこか寂しげに言う

「そりゃあんだ、こんな村に来る物好きは、そうそついなによ」
いまいち話が見えなかった僕は首を傾げた

「昔はよかつたさ、ライドに行くには絶対にこの村を通っていったからね、そりゃ宿も必要になってさ、毎日忙しくしてたもんだよ」

僕は疑問を口にした

「何か、あつたんですか？」

おかみさんは驚いた様子でこちらを見て、言った

「何があつたつてあんだ、ライドが滅んだんだよ、おまえさんも知ってるだろう!？」

そうだった、僕はこの世界の常識がないんだった
そんな時はやっぱりこれだよな!

「僕、記憶がないんです・・・」

伝家の宝刀、記憶喪失!

そして僕はおかみさんに、嘘とほんとをませこぜにして伝えた

- ・ 気付いたら森の中だったこと
- ・ 怪物に襲われたが、命からがら逃げたしたこと
- ・ 川沿いに歩いていて、橋を見つけたこと

怪物を倒したことで、腕が生えてきたことは伏せた

「はええ、あんたも苦労したんだねえ・・・」

おかみさんは目を丸くしたが、特に詳しくは聞いてなかった

「なんだい、じゃあ今この村が、人間が住んでる地区の一番端の村だっけとも知らないのかい？」

うん？どういふこと？

おかみさんの在り方（後書き）

できるだけ毎日更新を心がけていますが、これってやっぱりなかなか辛いですね

他の方がすごい長い間してるのを見てたので、頭が下がる思いです

しかし、一度走りだした以上は完走を目指します！とりあえずは主人公が無双するまで毎日・・・できたらいいな

燃えあがれ！俺の小宇宙コスモ！！

取り繕いの在り方（前書き）

前に200人以上が見てるといったな、あれは嘘だ（コマンドー風に
多分ですが正確には70人以上だと思えます、間違えた、恥ずかし
い・・・／／／

取り繕いの在り方

おかみさんに聞いて分かったことをまとめると、

・世界は今、魔物に侵略されて、人が住める場所が限られている
・ライドというのはこの村の隣にあった国（街？）で、少し前に滅ぼされている

・今残ってるのはイーアという国だけ

・橋の方に行くとイーアがある

・昔はそれこそ、大陸中に色々な国があつて、人がたくさん暮らしていた

・魔物の侵略は、200年ぐらい前から起きた
こんな感じだ

「そうなんですか、200年前より以前には魔物がいなかったんですか？」

「いや、いたよ、ただ好んで人を襲ってくるのはそんなにいなかったって話さ、それが徒党を組んで襲ってくるようになったのがだいたい200年前なんだとさ」

うーん？何が原因なんだろう？

「中には魔物をまとめる魔物の王が生まれた！って言うてる人もいるけど、実際に見た人はいないそうだよ」

・・・もしかして、僕が呼ばれたのってその魔王を倒すため、とかじゃないよね？

「まあ何にせよ、この村ももうお終いだろっねえ、住人はみ〜んな

逃げちまったし、残ってる連中も、覚悟の上さ」

・・・僕が、魔王を倒せるかも、なんていったらどんな顔をするだろう？

「なんだい人の顔をジツと見て、いくら美人だからってそんなに見るもんじゃないよ」

いや、流石に年齢差が、ゲフンゲフン

「とにかく、あんたも早いとこ逃げた方がいいかもね、いつ魔物が襲ってくるか分かったもんじゃないよ」

「そのために、儂がおるんじゃがな！」

いつの間にかいたおっさんが、話に割り込んでくる

「なにいつてんだい、あんた一人でどうにかなるなら、国が滅びたりするもんか」

「じゃがこの村一つくらいならなんとかなるじやろう、期待せずに見ておれ」

おかみさんが胡乱な目でおっさんを見て、おっさんが快活に笑う

「仲のいいご夫婦なんですね」

僕はポツリと呟いた

おっさんとおかみさんが目を合わせる

「だそうだが、どうじゃ、儂と一緒にになるか？」

「冗談でもよしとくれよ、私には旦那も息子もいるんだよ」

「え、夫婦じゃなかったんですか」

「誰がこんなボケオヤジと」

おっさんはまた笑っている

「それにこのオヤジにも子供と奥さんがいたはずだよ」

「いたってことは」

「・・・儂は、生まれも育ちも、ライドなんじゃよ」

・・・沈黙が生まれた

「なに、今の世の中よくある話じゃ、気にすることはないぞ？」

おじさんは、笑顔のまま言う

「あゝすまん、なんじゃ、そうじゃ、おま、名前は何としようんじゃ？」

「僕の名前は「このまえ」命「みこと」です、ミロトと呼んでください」

「儂の名前はダイジじゃ、よろしくの」

「あれ、あんだ、記憶喪失じゃなかったのかい？」

あ、やつちゃった・・・？

「記憶喪失じゃと？」

「あつはつはつは、名前は覚えていたみたいです」

その後、ダイジさんにも自分の状況を説明する

「ほ、だから魔物の特徴も知らなかったんじゃな」

「そうなんですよ」

「ではなんで、自分の瞳を黒だと思っと思ったんじゃ？」

痛い所を突かれた僕は、必死に頭を回らせる

・・・そうだ！

「いや、だってダイジさんの瞳が黒かったから、同じだと思って」

・・・く、苦しいか・・・？

「ふ、ん、まあいいわい、とにかく、魔物の特徴は知っておいて損はない、聞いておきなさい」

そういつてダイジさんは魔物の特徴を話し出した、以下まとめ

- ・体色は黒っぽいのがほとんどだが、あまり統一性はない
- ・最大の特徴は目が紅い事
- ・体形においては多種多様で、これによって判別することは不可能

- ・ 絶命すると、特別な例を除いて気体になって消え失せる
- ・ 人を執拗に狙う物が多い
- ・ 血液や肉体は猛毒で、口に入れてはいけない

「気体にならない特別な例ってというのは・・・？」

「ああ、それは実際に見た方が早いんでないかのう？ところでお主、金は持つとるか？」

あ、そういえば宿代どうしよう・・・！？

「お、おかみさん、どうしましょう！？僕一銭も持ってませんよ！？」

「ああ、宿代の心配をしてるのかい？いいよツケで、どうせ最後の客だしさ、気にしなさんな」

「そういう訳には・・・！そうだ、僕、力には自信がありますよ！力仕事は任せてください！」

「いや、そういわれてもねえ」

「ほう、力に自信があるのか、ならなおさらだ、どうだミコト、ちよっと付き合わないか？」

ダイジさんに言われて、僕はとりあえずついていく事にした宿を出ると、昨日は見れなかった街並みが広がっていた

左右に幅の広い道が続いていて、その両隣に宿が並んでいる

所々、酒屋や問屋があつて、ここが宿場町だというのが一目で分かる光景だった

しかし、そのどれもに活気や人気がない
さっきおかみさんが言っていたことは本当だったようだ

しばらく門の方に歩いていき、脇道に少し入ったところでダイジさんが言った

「僕の家だ、本来は違うのだが、村長の温情でここに住まわせてもらっている」

そういつて入っていった家の中は、イメージと違って清潔感があり、物が理路整然と並べられていた

「とりあえず、お主、武器は何を使う？」

言われても、武器など使ったことがない僕は答え様がなかった

「なんじゃお主、そこは記憶喪失なのか？」

なんだか呆れられてる気もするが、どうしようもない

「とりあえず持ってみよ」

そういつて剣を渡されたが、いまいち構え方がわからない

「駄目そうじゃな、ではこれは？」

今度は槍だけど、結果は同じ

その次は弓を、その次はナイフ、その次は鈍器を渡されたが、どれも結果は同じだった

「これも駄目か、お主、もしや過去に一度も戦ったことがない、なんてことは言わないわな？」

はい、その通りです、とは言えず、黙る
いや、あるぞ、戦ったこと

「い、一応戦ったことはあります、素手で、ですが・・・」

怪物と戦った時は、確かに素手だった

「素手じゃと？遙か昔はそうだったこともあったと聞くが、・・・
大丈夫なのか？」

「た、たぶん・・・？」

正直これからすること次第なのだが、この流れからするに・・・

「まあなんとかなるじやろ、では、森に行くぞ！」

やっぱり狩りなのか！？

取り繕いの在り方（後書き）

これedyouやく主人公の名前ができました！

ミコト君は嘘をついた事があまりないので、ボロでまくってますw

魔物狩りの在り方

僕は今、かご付きの背負子とナイフ、ロープなどが入った袋を渡され、門の前にいる

そこで準備体操を始めたダイジさんに倣^{なら}って、僕も準備体操をしていたのだけど・・・

「よし！では、参るか！」

そういうと、ダイジさんはすごいスピードで森の中に走っていった

「ほら、ついてこ〜いっ！」

そう言われて、慌てて僕も走り出す

「ほっほっほっほっほ〜！」

ダイジさんは僕の想像を遥に越えたスピードで走っており、昔の僕ならすぐに置き去りになっていただろう

正直ダイジさんを侮っていた、もしかしてこの世界の住人はみんなこうなのだろうか？

必死になってついていくが、川沿いを走ると違って木々が邪魔で、なかなかスピードに乗れない

対してダイジさんは、まるで木々が存在しないかの様に、するりと走り抜けてゆく

「どうした？そんなに力んでおると、体力がもたんぞ〜？」

「だったらもつとスピード落としてくださいよ〜！」

いいながら必死についていくこと15分位、ようやくダイジさんが立ち止まった

「ふむ、このあたりでよかろう」

ダイジさんは腕に巻いていたバンダナの様なものを口と鼻を覆う様につけだした

「よいか、魔物がでるような場所では、極力口と鼻を覆わねばならぬぞ」

「?なんでですか?」

「お主、話を聞いておったのか?」

うん、ということとは魔物の特徴と関係があるのかな?

「魔物の血肉は人には猛毒だ、返り血が口に入って死ぬ者も少なくないんじゃないよ」

「だから口と鼻を覆って侵入を防ぐのですね?ですが、傷口からの侵入はどう防ぐのですか?」

「うむ、何故かは知らぬが魔物の毒は傷口に対してはあまり効かないのじゃ、だから、とりあえずは口を覆っておればよいぞ、ほら、袋に入れておいたバンダナを巻くのじゃ」

言われて袋を調べると、ダイジさんと同じような布があった
急いでそれをつける

「よし、では早速じゃが・・・」
魔物狩りか？

「採集を始める！」

・・・どうやら違うらしい

それからしばらくは食べられる物や毒になる物、薬草や有益な物の見つけ方を教えてもらいながら過ごした

「よいか、この薬草は、傷口につけるだけでよい、そうすれば直ぐに傷が治るぞ」

「よいか、このきのこは食べてはいけない、手足が痺れるぞ」

「よいか、緊急時はこれも食べられるぞ、ただし不味いから持って帰る必要はない」

よいか、よいか・・・

そういつて様々な事を教えられる
頭がパンクしそうになりながら必死に覚えていると、ダイジさんが遠くを見つめた

「む、どうやらお出ましのようじゃ」

見ると、狼のような真っ赤な目をした獣が、こちらに近づいて来ている

「とりあえずは見本を見せるとしよう、お主は下がっくれ」

そういつてダイジさんは一歩前にでた

腰に刺していた刀を抜いて、構える

狼は依然、近づき続ける

そして、狼がダイジさんの一刀一足の間合いに入ると思われる、寸前！

「セイツー！！」

ダイジさんが動いた、初動が全然見えない！

一瞬の内に狼と交差したダイジさんは、攻撃の姿勢を保ったまま、ゆっくりと振り返った

狼の首が殆ど体と繋がってない事に気付いたのはこの時だ
交差の瞬間に放たれた斬撃は、見事狼の首に吸い込まれていたようだ

「この様に、攻撃した後も気を抜いてはいけない、魔物の中には恐ろしく生命力の強い物もある、一瞬の油断が命取りじゃ」

しかし、狼はもうピクリとも動かなかった

「まあ大抵の物は首を刈れば死ぬ、しばらくして少しも動かなければ警戒を解いてもよいぞ」

「すごいです！正直一瞬すぎて何が何だかわからなかったですけど、

とにかくすごいです！」

「お主・・・まあいいか、と、忘れてはいかな」

そういつてダイジさんは狼に近づいていった

「何をするんですか？」

「いやなに、特別な例を見せようと思ってな」

そういつと、ダイジさんはナイフで牙を抜いて、手に持った

「この様に、必要だと思われる物を刈り取って、それを自分の物だ
と思い込むと」

徐々に狼が、黒い霧の様になって消え始める

そんな中、ダイジさんの手の内にある牙だけが残って、他は全て消
えた

「ほれ、自分の物として残すことができるのじゃ」

そういつてその牙を、僕の背負っているかごの中にいれた

「さあ、採集を再開するぞい！」

そしてしばらくして・・・

「む、また来おったな」

今度は角の生えた兎の様な魔物があらわれた

「では今度はミコト、お主が相手をしてみなさい」

そういつて、ダイジさんは僕に視線を寄越した

「は、はい！」

僕はかごや余分なものをその場に置いて、一歩前に出た

兎はこちらを見て、様子を伺っている様だ

こちらもどうするか、様子を見てみると、兎が角を突き出しながら飛び掛って来た！

「ヒッ！」

・・・僕は左に飛んで避けた

「・・・お主、やる気があるのか・・・？」

ダイジさんは呆れた様子でこちらを見ている

「だっ、だつて危ないじゃないですか!？」

僕はひたすら避けながら、その言葉に反抗する

「ヒッ！ホッ！ヘッ！フッ！トオッ！」

とにかく避けまくっていると

「ええい！いい加減にせんか！！」

ダイジさんの叱責が飛んだ

「う、うわああ〜っ！！」

僕は叫びながら腕を前に構え、飛びかかってきた兎の角を掴んだ
兎は空中でジタバタもがいている

「うお〜っ！！」

僕は角を持ったまま、その兎を地面に叩きつけた

1回では不安なので、2回3回と連続で叩きつけ続けた

「お〜い、もうよいぞ〜」

ダイジさんの言葉に気がついて、角の根元の方を見ると
兎だった物が付着していた

「ヒッ！！」

僕は腰を抜かしてしまったが、角を持ったまま、これは僕のだと念
じた

兎が消えていく

「あれ？」

角も消えていった

「ふむ？どうしたのじゃ？ちゃんと念じておったか？」

「え？あ、はい、確かに僕のものだと念じていたはずなのですが・・・」

「ふむ、子供にもできることじゃし、どうなっているやら・・・？」

言外に、子供にも出来る事が出来ないといわれているようで、落ち込んでいると

「いや、そういう意味じゃなくてな、出来ない訳はないんじゃない、ただ、なぜ消えてしまったのか、僕にもわからないのじゃ」

そう言われたので、少し気が楽になった

「しかし、もっとこう、戦い方をスマートに出来んかいな？こっちにまで血が飛んできたぞ」

そういつてダイジさんは笑った

そして、僕の初めての、いや、2回目の魔物狩りはこうして終わった

魔物狩りの在り方（後書き）

このあたり、説明回が続いています
矛盾が出来てそつで、ドキドキです

魔法の在り方

そうやって過ごしていて、太陽が真上に登ると、ダイジさんが言った

「よし、そろそろ昼飯にするかの」

「村に戻るのですか？」

「いや、とりあえず、罨を見て回る」

そういつてダイジさんは歩きだした

しばらく歩いていると、ロープで逆さ吊りになった兔がいた

「ほう、それじゃこの兔を昼飯にするかの」

そういつて兔の耳を持ってこちらに渡し、すぐにまた罨を張って歩き出す

今度は木々がなく、少し拓けた場所に来た
そこには、簡単に作られたかまどがあった

「では、兔を捌く、見ておれ」

そういつてダイジさんはナイフを巧みに使い、見る見る兔を肉の塊にしていく

「こんなもんかの？」

そこにはスーパーで売っていてもおかしくない、お肉が出来ていた

「では、薪を拾って来てくれ」

「はい！」

僕は急いで薪を集めた

すぐにもどると、ダイジさんはなにやら料理の下ごしらえをしているようだ

かまどの上には、いつの間にか鉄板が乗っていた

「では、料理をするかの」

そいつってかまどに薪を組み、火をつけれる状態にした

「そういえば、どうやって火をつけるのですか？」

「どうやってって、魔法に決まっとろう？」

なんだ魔法か・・・！？ま、魔法！？

「え、ダイジさん魔法が使えるんですか！？」

「なんじゃうるさいのう、使えるが、それがどうかしたのか？」

まるで使えるのが当たり前のような調子で言うので、もしかしたらこの世界では使えるのが当たり前なのかもしれない
それにしても魔法である、異世界と言えば定番とはいえ、実際に見るのは初めてだ

「ど、どんな魔法ですか！？見せてください！！」

「お、おう、なんじゃかすごく食いつきがいいのう？まあ見てなさい」

ダイジさんは両手をかまどにかざし、呪文を唱えた

『在りし日の炎よ、ここに再び熾^{おこ}れ』

すると、かまどの薪の方から僅かに火の粉が上がり結果かまどに火がついた！

・・・正直シヨボい

「なんじゃ？なんで残念そうな顔をしとるんじゃ？」

「いや、なんとというか、もっとこつ、燃え上がる感じをイメージしていたので・・・」

「まあそういう魔法を使うのもおるが、儂は基本的にはこついったものしか使わんのう」

！いるんだ！そういう魔法を使う人！

顔が笑顔に戻った僕を尻目に、ダイジさんが料理を開始する

「まあ肉を塩で下味つけて、野草を適当に炒めただけ何じゃがな」

そういつていたが、野性味あふれるその料理は、塩も使わなかった肉の炙り焼きより遙においしかった

「ほれ、これも食べなさい」

そういつてとても堅く焼かれたカンパンのようなものを渡された
最初は堅くて味もないが、じつくり噛んでいると、わずかに甘味が
あった

「それは非常食としても優秀なパンでな、森に入る時は常に持つと
るんじゃ」

その後も少し採集をして、村に帰ることとなった

帰り道にて

「しかしお主、魔法については覚えておらんのか？」

「はい、これが全く覚えてません、ですので出来れば教えていただ
きたいのですが・・・」

「うむ、しかし儂は正直な話、魔法にはあまり詳しくないのでな、
村長に聞いてはいかがかな？」

「村長さんは魔法にお詳しいのですか？」

「いや、あの人は何にでも詳しいぞ？だから魔法に関しても知って
るはずじゃ」

そういつた訳で、僕たちは村に着いた後、村長の家に向かう事にした
村長の家は、村を両断する道の真ん中あたりで、左に曲がると正面
にあった

「おーい、村長さん、いらっしゃるかのー？」

「フォッフオッフオッフ、開いとるぞい、入ってらっしやい」

家に入るとすぐにテーブルがあり、その奥に村長が座っていた。村長は顔にいくつもの皺を蓄えており、頭髪も白く、しかし背筋は伸びており、目はどこか神秘的な理性を感じさせた。

「ふむ、お前さんがこの前きた、魔物に見える男の子かい？」

村長のいきなりの言葉にビクツとしたが、失礼がないようにできるだけ丁寧話す。

「お初にお目にかかります、私「ゴホキ命カミと申します、先日からこちらでお世話になっております」

「フォッフオッフオッフ、これはご丁寧に、ワシはこの村で村長をしておるラクシじゃ、よろしくのう」

村長は柔らかい笑顔をたたえながらそう言って、ダイジさんに視線を寄せた。

「して、ダイジよ、何用かな？」

「はい、このミコト、記憶を失っているというので、色々と教えているのですが、魔法については僕は詳しく知らないの、村長にたずねてはどうかと思い、参った次第です」

「フォッフオッフオッフ、そうか、魔法か、ワシもそこまでは知らんが、知ってる範囲についてなら、話そう、では、掛けられよ」

そういつて村長は僕たちに椅子をすすめた

「では、魔法について話すとするかのう、実は魔法はわからないことだらけなんじゃ」

いきなりの発言に目を剥くが、黙って話を聞く

「皆が皆、当たり前のように使うが、実際はどうして使えるのかわかっていないのじゃ。では何故魔法が使えるか、それは体を例にするとかかり易いかのう、お主は腕を動かす時、どうすればいいかわかるかのう？自分の腕は自分で動かせるのが当たり前で、何故自分で動かせるかはわからないのじゃ、昔犯罪者を実験台にして、それを解明しようとした者もおつたが、腕の中にあるとある線を切ると、その先は動かなくなるといのはわかったが、実際にどうして動くかはついにわからなかった、それと同じで魔法もどうして通常ではありえない、超常の現象が起こるのか、誰にもわからん、しかし、いくつかわかっていることもある、……」

長い、長いぞ、村長の話！

つまり、まとめるところ……か？

- ・魔法は意志の力で使う
 - ・呪文を使うのは、その意志を確固たる物にするため
 - ・よって呪文は使わずとも魔法は使える
 - ・身振りも同様
 - ・使えない者はあまりいない、が、使っても意味がない程威力がない（火もつけられない）人が大体5割ぐらい
 - ・そこに血筋などはない関係ない
- こ、こんな感じかな？

「……、まあ、そんな訳じゃから、魔法はとってもチャーミング

なのじゃ
」

「は、はあ
」

「お主、聞いておったか？」

「はい！ダイジョウブです！」

「ならいいが、これダイジ、眠るでない」

「・・・ん、終わったのか？」

やけに静かだと思ったら、寝てたのか

「では、実際に使ってみるかのう」

そういつて村長さんは指を突き出した

『灯れや灯れ、我が闇を照らせ』

そういつた直後、指からチャッカマンの様に火が出てきた
数秒して、指から火が消えた

「ふう、こんなもんかのお」

「あの、ダイジさんと呪文が違うのですが、違う魔法なんですか？」

「お前さん、ホントに話を聞いておったか？呪文なんて人それぞれ
じゃよ、魔法も人それぞれじゃ、ようはイメージじゃ、イメージ、
まあ人のを真似した方が簡単かもしれんな、実際に起こるといこうこ

とがわかつとるから、イメージがしやすいじゃろ？」

なるほど、では・・・

「灯れや灯れ、我が闇を照らせ」

僕は指を突き出し、村長さんと同じ呪文を唱えた

「・・・あれ？」

しかし一切変化がなかった

「イメージじゃイメージ、体を突き抜ける程のイメージが、現実に変化をあたえる」

もう一度、今度は気迫を込めてっ！

「灯れや灯れ、我が闇を照らせっ！」

・・・何も起こらなかった

「うむ、まあ、使えずとも問題ない、そんな人はいくらでもおる」

村長さんが気まずげに、僕に労りの言葉をくれる

「まあ、なんだ、死ぬ訳じゃないんじゃ、気にするな」

ダイジさんが生温かい目で、こちらを見ている

・・・悔しくなんて、ないヤイ

魔法の在り方（後書き）

ついに来ました、魔法です

しかしここにきて、さらにジジイが倍！若い子が主人公しかいない・

・

因みにダイジは40歳ぐらい、村長は75歳ぐらいだと脳内設定しています

前兆の在り方

それからは朝起きて、体を洗い、朝ご飯を食べて、ダイジさんと森に入り、終わったら宿に戻って夕飯を食べ、寝る前に魔法を試すという生活サイクルが出来ていた

「……よし！」

ようやく魔物を狩るのにも慣れてきた
今はちょうどゴリラの様な魔物の頭を、平手でハジキ飛ばしたところだ

「しかしお主は、本当に異常な腕力だな」

ダイジさんにして、異常だと言わしめる力で魔物を殺すのだが、最近、魔物の血を見ていると、何故だか心がザワつく

キケンだ、キケンだ

と、本能が警告するのだが、魔物の血から、目が、離せない

「おい、聞いておるのか？おい？」

「……！あ、はい！大丈夫です！」

「ならいいんじゃないが……」

平穏な時間が、終わろうとしていた

「ダイジさんたら酷いんですよ」

「それはわかったけど、これ、本当にもらっていいのかい？」

「もちろんいいですよ、僕が持っていててもなんの意味もありませんから、もらってくれたら嬉しいです」

「ならいいんだけど・・・」

今僕は森から宿に帰ってきて、夕飯をいただいている

やはり何度食べてもこのご飯は美味しい、今日は魚料理だ

因みにおかみさんがこれ、と言ってるのは僕が森から持って帰ってきた物だ

魔物の部位だったり、食べれる野草だったり、フルーツだったり、時には見かけた動物を狩って持ってきた

せめてもの宿代の代わりだ

「そういえば、おかみさんは魔法、使えるんですか？」

「あたしは使っても意味がない質の人間だから、使えることは使えるけど、滅多に使わないねえ」

「じゃあ料理とかはどうしてるんですか？火を起こす時とか」

「そりゃあんた、魔方陣を使うのさ」

「魔方陣？」

「そうさ、そいつを使えばあたしにだって火を起こすぐらいはできるさ」

「詳しく聞いてもいいですか？」

おかみさんの話によると魔方陣は、

- ・複雑な形をいくつか組み合わせ、意味のある陣を作り出すことで使える魔法
- ・使用者の魔法の素質に関わらず、同じ結果を出すことが出来る
- ・ただし少し気だるくなる

「まあ魔法を使うと気だるくなるのは、当たり前なんだけどね」

「そうなんですか？」

「魔法は意志の力で使うだろう？その意志の力つてのは使った後消えちまうのさ、だから何度も使うとやる気が起きなくなるのさ」

・・・村長の話より100倍分かり易い！

「そうだったのか、僕は魔法が使えないのでわからないんですよ」

「なに、あたしは生まれてこの方魔法なんて5回も使っていないさ、それでも全然生活に支障はないよ、あんたも気にしなさんな」

「そうですよね、ありがとございます！」

魔法の練習してるのバレてたのかな？

その時である

「ミコトさんはいますか!？」

宿に入ってきて、開口一番にこういったのは、僕も何度か見たことがある村の人だ

「はい!ここにいますよ?」

息を整えながら、その人は僕の元に歩いてきて、

「ダイジさんが呼んでます、いつもと逆の門で待ってるそうだ」

そう言った

「あ、はい、急ぎみたいなので、すぐに向かいます」

「ああ、そうしてもらつと助かる」

「じゃあおかみさん、また後で」

「あいよ、気をつけてね!」

ダイジさんが夜に僕を呼び出すなんて、はじめてだ
何があつたんだろう?

・・・嫌な予感がする

僕は急いで門に向かった

門ではダイジさんが待っていた

「む、ミコトか、待っておったぞ」

「ダイジさん、どうしたんですかこんな時間に」

「いやなに、予感がするんじゃないよ、何となくだが」

そこでダイジさんは少し躊躇して、だけでもはっきりと言った

「魔物の襲撃がある気がする」

魔物の襲撃、これによってダイジさんの故郷、ライドは滅びたというその襲撃が、もうすぐ起こるってことか？

「僕は何度か魔物の襲撃を受けておる、その、前兆の様なものがあるのじゃ」

「それって的中率は・・・？」

「・・・１００％じゃ」

言葉が出なかった、数多の国を滅ぼした魔物たちが、今、この村を襲おうとしている

・・・村が滅ぶ？

おかみさんも村長も村人も、ダイジさんも、みんな死んでしまう？

「どつするミコト、今なら逃げれるぞ？逃げたとて、誰も責めん」

「僕は・・・」

僕がどうするかは、決まっていた
みんな、僕を暖かく迎えてくれた

「僕はこの村を守ります、きっと、守ってみせます」

「・・・フン、そう言うと思ったわい」

ダイジさんは、どこか寂しげに、自嘲気味に笑いながらそう言った
「魔物はこの先、つまりライドからこの街道を通ってくるだろう、
数はわからんが、おそらくそんなに多くはない、この村が潰せれば
いいだけの戦力でくる」

「どうしてそんなことがわかるのですか？」

「勘じゃ」

・・・なんとも心許ない

「僕の勘を侮るでないぞ？それだけでこの戦場を生きてきたのじゃ
からな！」

カツカツカツ！っと快活に笑い、ダイジさんは僕を見た

「なに、僕とお主なら、何とかなるじゃろ！」

「またそんなこと言って、だからおかみさんにも相手にされないん
ですよ」

「それはそうと、お主の目、だんだん黒くなってきたな」

「え、本当ですか!？」

「ああ、いつか本当に真っ黒になるかもな」

「やった!そうしたらもう魔物と間違えられないぞ!」

「いや、お主は腕のこともあるからな」

「なんでそういうことを言うんですか・・・」

そうやってくだらない話をしていると、僕の目に何かが写った

「どうやら来たみたいですよ」

「うむ、そのようじゃ」

無数の赤い目が、こちらにやってくる

「準備はいいですか？」

「誰に聞いとるんじゃ」

ダイジさんが刀を抜いて、構えをとる

僕の初めての戦が、始まる

前兆の在り方（後書き）

次回、大暴れの予感！

魔方陣は、ただこういものがありませんよ〜っていう説明です
大晦日、のけものにされて暇なあなたに捧ぐ

襲撃の在り方（前書き）

新年明けまして、おめでと〜うございます！

これを読んでいる方が、少しでも幸せな新年を迎えられることを祈っております

襲撃の在り方

「うおおおおおおっ！！」

見敵必殺（サーチ&デストロイ）！

僕は見て、即攻撃を繰り返している

適当に手足を振り回していても、当たれば当たった場所が吹き飛ぶのでダメージをあたえられる

魔物は死んでしばらくすると、消えてなくなってしまうので、死体の山は出来ていないが、もし消えていなかったらいくつもの山が出来ていただろう

対して、ダイジさんはすごく静かに佇んでいて、敵が間合いに入ると

・・・スパンツ！！

つと最小限の動きで敵を殲滅する

しかしその動きはあまりにも素早く、また隙がないため体に傷はなくそして何より一撃必殺だ

魔物がタイミングを合わせて襲ってきても、

・・・シュパパパパンツ！！

つとまるで機械の様に両断してしまう

圧倒的な力を持つ僕と同じぐらい、いや、それ以上の魔物を倒している

恐ろしい事に、これを1時間近くずっと維持している

・・・ダイジさんって、本当に人間ですか？

「はあっ、はあっ、はあっ、はあっ……」

「大丈夫か？まだまだ敵はおるぞ？」

「まだ、まだいけます！」

「そうか、もう一踏ん張りじゃ！がんばれ！」

僕は体がうまく動かなくなってきた、精神的にも疲れてきたが、力でなんとか状況を維持している

「後ろじゃ！」

「……ッ！！」

いつの間にか背後に回っていた爪の長いコアラみたいな魔物に攻撃されたが、なんとか反応して、左手でガードする
しかし、頬に僅かに切り傷ができる

「気をつける！背後に敵を回すな！！」

言われなくてもそうするつもりでいたが、集中力が切れてきたようだ

「……ッアア！！」

根性で相手を叩き潰す

危険だ、危険だ、キケン、キケン、キケン

頭の中で、僕の本能と呼べる部分が警告を発するが、無視して闘い続ける

頭が大剣の先のようになったイノシシ型の魔物が走ってくる

「・・・つりやー!!」

咄嗟に右腕でガードすると、右腕が僅かに切れた!

これまでどんな状況でも傷つかなかった腕と足が、初めて傷ついた

僕は動揺を殺して、左手でイノシシをハジキ飛ばす

もう殺すだけの力を込めることが出来なかった

象のような魔物の体当たりを両手で受ける

「・・・つつつあー!!」

今まで力負けなどしたことがなかったのに、ハジキ飛ばされる

「ミコトオ!!!しっかりせい!!!」

ダイジさんが激を飛ばすが、僕は起き上がれなかった

僕の、手足が消えていた

目の前にはまだ無数の魔物たちがいた

このままでは、

死んでしまう！

死ぬ？

こんなところで？

いやだ

いやだいやだいやだいやだいやだっ！！

鳥型の魔物が素早く近づいてくる

動ける範囲には、先ほど頭を握り潰した熊型の魔物しかいない

ハヤクハヤクハヤクッ！

その血が、頭を失った体に大量に流れ出ている

キケンキケンキケンキケンっ！

その血から、目が離せずにいる僕は、唐突に理解した

危険なのは、魔物の血を飲むことじゃない

危険なのは、魔物の血を飲まないことだ！

僕は急いで顎を地面に擦りつけ、バンドナを外すと、熊型の魔物に這って近づく

鳥型の魔物がもうすぐそこにいる、嘴をこちらに向けて、突っ込んできた

熊型の魔物にたどり着き、その死体に歯を立てると同時に、鳥型の魔物の嘴が、僕の後頭部を直撃した

「ミコトオオー！」

ダイジさんの叫びを聞きながら、僕は安堵した

・・・間に合った！

右腕を頭の後ろに回し、鳥型の魔物の、少し僕の後頭部に刺さった
嘴を掴みながら

僕はさらに血を啜る

最初は細く、頼りなかった右腕が、元の、本来の太さに戻っていく
振り向いて鳥型の魔物に噛みつく

生きたまま血を吸われた魔物は、力なくその一生を終えた

今度は左腕が生えてきた

腕だけが異常にたくましい猿型の魔物が、僕の頭を握りつぶそうと
しているが

その腕の元の方を、握りつぶす

そしてまた血を啜ると、今度は右足が生えてきた

一回り大きい狼型の魔物が飛び掛ってくるが

右足で生きたまま串刺しにする

当然その血も啜ると、僕の体は元の五体満足になった

「ミコト・・・?」

「・・・フツ、フハハツ、ハーハハア!!!!」

それどころかとても清々しい気分だ!

何か満たされない物が、今宵、初めて満たされた!そんな気分だ!

そんな最高の気分のまま、僕は魔物の虐殺を始める

元から一方的ではあったが、理性の箍タガが飛んだ僕は、これまでより素早く、殆ど敵を見ずに攻撃を行う

そして折を見ては魔物の血を啜る

「・・・っ!」

ダイジさんが何か言いたげであったが何も言わず、魔物の殲滅に集中する

一方的な虐殺は、さらに速度を増した

「・・・ぶづ、こんなもんかろう?」

「そうですね、もういないんじゃないですか?」

僕等の回りにはもう魔物はいない

いや、いるにはいるが、もう動かなくなったものだけだ

「しかしミコト、どうしたんじゃ？いきなりハジキ飛ばされたと思ったら、狂ったように魔物を蹴散らすから、気でも違えたかと思っただぞ？」

「ハツハツハツ・・・」

「それに僕の見間違いでなければ、魔物の血を啜っておったように見えるが？」

「み、見間違えじゃないですかねえ・・・？」

「・・・、じゃあ何故バンダナが外れておるのじゃ？」

「・・・」

「まあよい、今日はつか・・・っ！何か来おるぞっ！！」

遠くから紅い目が四つ、空を飛んでやってくる

「こやつらは・・・ドラゴン型かっ！！」

それは僕等の4〜5倍以上はありそうな竜型の魔物だった
それが二匹、高速でこちらにやってくる

「クソッ！やっかいなのが来おった・・・！気をつける！やつらはこれまでとは訳が違っぞ！！・・・ミコト？」

僕はそれを見つめながら思った

おいしそうな血の塊が2つ、向こうからやってきた

これまでの血もおいしかったけど、あいつらは何故か、もっとおいしそうだ

・・そうだ、迎えにいこう、そうだ、ソウダ

「ミロト?..おい、ミロト!..?」

僕は走り出していた

誰にも分けてやるものか、あの血は俺のものだ

地面を砕く勢いで蹴り、僕は飛んだ

襲撃の在り方（後書き）

本日は連続投稿いたします！一時間後にまたお会いしましょう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6764z/>

魔血吸の在り方

2012年1月1日01時51分発行